様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月 １５ 日現在

機関番号：３７３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０６６９８

研究課題名（和文）パリ外国宣教会がもたらした道具・技術に関する研究：宣教師による教会堂建設の再評価

研究課題名（英文）A Study on the Construction of Churches by Missionaries of the Foreign Missions of Paris through their Tools and Technologies

研究代表者
山田　由香里（YAMADA, YUKARI）

長崎総合科学大学・工学部・教授

研究者番号：６０４５４９４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　旧出津救助院蔵ドロ神父関連道具は約1400点あった。創立時の1880年代に仏国から伝来した織物道具は貴重。外海で教会堂をドロ神父と手掛けた大工川原家は、得た技術で、その後11棟の教会堂を統一的手法で建てた。
　鉄川与助は1906～1951年に50箇所のキリスト教施設を建てた。仏人神父は建築の知識と技術を持ち、長崎の工法を観察し、不足は改善した。現場は神父との協同で、与助の研究熱心が建物の多様性につながった。
　ミッショナリーアーキテクト、J.H.ヴォーゲルについて、オハイオ州立大学所蔵資料から明らかにした。教会堂の成熟期の1915年頃は、1907年「五足の靴」が広めた南蛮文学ブームにもあたる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　長崎・九州の教会堂について、大工・川原家３代が手掛けた建築、鉄川与助が手掛けた建築に整理分類することができた。川原家と鉄川与助の各々の建築的特色が明確になった。教会堂建設は宣教師との協同だが、宣教師や大工の特色が教会堂に現れることがより明らかになった。川原家の手掛けた教会堂は明治初期の木造教会堂でもある。活水学院や九州女学院を設計しながらも不明な点が多かったミッショナリーアーキテクト、Ｊ・Ｈ・ヴォーゲルの事績と建物を明らかにできた。大きな成果である。1915年頃に完成形を迎えた長崎の教会堂は、当時の文壇の南蛮文化ブームの只中にあった。建築と文学の関連を示唆する。今後の展開につなげたい。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study is construction of churches in Nagasaki by missionaries through their tools and techniques.
　There are 1,400 tools of Father de Rotz in the former Shitsu aid center. The weaving tools were brought from France in 1880s. The Kawahara family of carpenters worked with Father de Rotz on the churches and convents in Sotome area. The Kawahara family built 11 churches by 1952. The structure is same, gabled roof, tri-aisle interior, semicircular arch opening and wooden ceiling. The other carpenter Tetsukawa Yosuke built 50 Christian buildings between 1906 and 1951. According to Tetsugawa, the French priest had knowledge and skills in construction. Tetsukawa worked on the site in collaboration with priest.
　Joshua Helmes Vogel, 1889-1970, the missionary architect came to Japan 1913-17 and 1925-26. I organized his activities through the Ohio State University collection. The period of the churches completed was also the time of boom in Nanban literature in Japan.

研究分野：建築歴史・意匠

キーワード：長崎の教会堂 Churches,Nagasaki　パリ外国宣教会（MEP）　鉄川与助（Tetsukawa Yosuke）　大工・川原家（Kawahara family）　Ｊ.Ｈ.ヴォーゲル（J.H.Vogel）　ド・ロ神父（M.M. de Rotz）　Missionary Architect　五足の靴（Gosokuno-kutsu）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2009～2015 年度に科研費（若手研究Ｂ）を受けて、長崎の教会堂建築の道具・技術・組織について歴史的調査を実施し、大工道具の復原的研究を実施した。

研究の結果、鉄川与助の大工道具には西洋技術の受容が見られ、パリ外国宣教会の宣教師から手ほどきを受けながら教会堂建築を手がけたという従来の説を実際の道具から明らかにできた。19 世紀末から 20 世紀初頭のパリ外国宣教会の活動は、当時急速に成長した世界的な物流システムで下支えされていた可能性のあることを見出した。

以上の成果を得る中で、長崎市外海地区の修道院から、修道院に遺るド・ロ神父の教会堂建設や授産事業の道具を見てほしいと依頼を受けた。ド･ロ神父の道具は、欧米からもたらされたもので、建築、土木、医療、染色、食産業等の広範囲にわたり、総数は約千点にのぼる。これらの道具が解明できれば、宣教師らの活動が欧米の通販システムに裏付けられた歴史的でグローバルな活動であったことを実証でき、日本における教会堂建設と授産事業について歴史的価値を再評価することにつながると考えた。これが、本研究の着想に至った経緯である。

２．研究の目的

本研究は、パリ外国宣教会の宣教師がもたらした道具を読み解き、技術受容の過程を実証し、それは世界的な物流システムのもと可能だったことを明らかにする。宣教師の教会堂建設や授産事業は、日本国内において一時的で地域的な活動としてこれまで捉えられがちだったものを、19 世紀の世界的な宣教の春の時代における歴史的でグローバルな活動であったことを実証的に再評価することを目的とする。

３．研究の方法

研究方法は、4 段階からなる。第 1 は、ド･ロ神父の関連道具の調査を行い、名称・形状・使い方を明らかにする。第 2 は、第 1 で調査した道具の整理と復原を行い、データベースを作成する。第 3 は、他の宣教師のもたらした道具・技術の類例調査を行う。第 4 は、総合的検討で、第 1 から第 3 で明らかにしたことを総合的に検討し、パリ外国宣教会のわが国における教会堂建設と授産事業を実証的に再検討し、歴史的価値を再評価する。

４．研究成果

(1)旧出津救助院所蔵ド・ロ神父関連道具

長崎市外海地区にある旧出津救助院は、フランス人宣教師マルコ・マリ・ド・ロ神父(1840-1914)が 1883 年に建てた授産施設である。建物は、2003 年に国重要文化財に指定され、2007-2012 年にかけて修理工事が行われた。その際、中心施設の授産場に保管されていた道具が別置され、詳細な調査にまでは至っていなかった。未調査の道具を調査・記録・整理した。全容は以下のとおりである。

①道具の種類と点数

道具を一点ずつ実測し、調査を行った。総計は 1424 点［35 点］で、内訳は㋐織物関係が 192 点（糸紡ぎ 66 点［明治初期～16 年・4 点］、織機 96 点［明治初期・4 点］、型板 30 点）、㋑食品製造関係が 53 点（そうめん 16 点［明治初期・2 点］、醤油 7 点、調理器具 30 点）、㋒農具が 54 点［明治初～昭和 25 年・19 点］、㋓宗教関係が 85 点、㋔その他 1040 点［明治初～昭和初期・7 点］であった。角括弧に示したのは、昭和 47 年の民具調査カードで当時の出津修道院(救助院の後身)長・松下ヨシ氏所有の道具の年代と点数である。

②代表的な道具

道具の 13%を占めるのが㋐織物関係の道具である。図１①の糸車は、車輪・フライヤー・ボビンがばらばらになっていたものを復原した。6 基以上ある。民具調査カードよると、フランスから明治初期に取り寄せたもので、麻や絹などの糸を足踏みで回転させて巻いた。同様の道具がトヨタ産業技術記念館にサクソニー紡車としてあり、ボビンとフライヤーを通して糸の撚りと巻き取りを同時に行える。図１②は、バッタン高機(フライシャットル、織機の筬をはめて、杼を左右に通す)のバッタン部分である。上部の横木中央に糸を通す滑車がつく。バッタンが 6 個あり、高機も 6 台以上あった。これもフランスから取り寄せたものである。

図１③は、救助院授産場の内部の様子を明治期に宮崎惣三郎氏が描いたもので、1 階南西側で高機を使う様子が描かれている。この図によるとバッタン上部を頭上の横木に固定し、立って織る様子が描かれている。図の右側に描かれている舵状のものはカグラで、織機の糸または布を巻く。バッタンとカグラの寸法から幅 50 ㎝の布を織ることができた。図１④は木製の洋服型板で、ベストの前身頃と後ろ身頃である。救助院では明治初期から洋式の作業着を着用していた。長崎居留地の学校の衣類も手掛けた。

㋑食品製造関係は、そうめんを干す木板が 15 点あった。㋒農具は、穀打ち台や千歯こきの脱穀の道具があった。犂や馬鍬の牛や馬に引かせて土壌を耕す農具もある。㋓宗教関係は、ろうそく立てやろうそくを作る道具の他に、ロザリオや祭服などがある。㋔その他は、フランス製の笛や、ド・ロ神父が長崎と外海を往来する際に使用した船の帆がある。

③まとめ

糸車や織機は救助院創立時にフランスから取り寄せたものである。日本国内におけるバッタン高機の早い例は、1873 年に京都西陣の伝習生がフランスのリヨンから持ち帰ったもので、以

後フライシャットルの技術が国内に広がり、織機の生産性が高まった(トヨタ産業技術記念館の展示解説による)。救助院の道具は、創立時の 1880 年代にド・ロ神父によってフランスから外海に直接、道具と技術が伝来した。国内の道具も含まれ、道具を使うのは外海の人々であるから、従来からこの地で使われてきた道具も取り入れている。道具の年代は、古いものは 1880 年代に遡り、昭和初期のものまである。救助院授産場 1 階の内部空間は、約 23.4×9.2×3.6mの広さがあり、フランス製の大型道具も十分に使えるように建てられたことが窺える。

図 1 左から①糸車の復原図(105×125×44 ㎝)、②バッタン(159×131×10 ㎝) 、③明治期の出津救助院授産場内部の様子(宮崎惣三郎氏画、出津救助院所蔵)、④洋服の型板(93×36×1 ㎝)

（２）大工・川原家三代の教会堂建設

旧出津救助院所蔵道具の調査を進める中で、同じ外海地区の黒崎教会堂（1920 年完成）を建設した大工・川原家の存在が浮かびあがってきた。川原家は、初代川原久米吉（1819-1903）―2 代忠蔵（久米吉四男、1861-1939）―3 代正治（忠蔵長男、1891-1969）・伝次郎（忠蔵三男、後に片山家に養子に、1897-1982）に渡って、大浦天主堂、江袋教会堂・1882、馬渡島教会堂（旧紐差教会堂・1886、1929 移築）、旧大名町教会堂・1896、神ノ島教会堂・1897、黒崎教会堂・1920、山野教会堂・1924、津和野教会堂・1931、稲佐教会堂・1950、中町教会堂原爆後再建・1951、善長谷教会堂・1952 の 11 箇所の教会堂を手掛けた。一覧にしたのが図 2 である。

①大工・川原家の教会堂の特色

一覧にすると、大工・川原家が手掛けた教会堂に共通項が見えてくる。外観は大きな切妻屋根とし、正面に山型の壁を見せる。内部は３廊式とし、アーチは半円形を採用する。身廊の中央部のアーチは半円が少し扁平になる。片山伝次郎の聞取りによると、「コウモリ天井を張るときは、内部で足場を 3 階ぐらいにし、上から張る人と下から張る人でやった。天井の竿は半円の角から角にするのが、反りが遠くなるので難しかった。ロープで曲がりを出し、柱のキワで曲がりが強くなるようにした」という。リブ・ヴォールト天井の面部分は、漆喰塗ではなく板張りとする。

②ド・ロ神父設計の黒崎教会堂図面写真

片山伝次郎御子孫の家に、図 3 の教会堂の図面写真 6 枚が伝わる。ド・ロ神父が設計した出津教会堂の増改築後の姿に酷似し、封筒の消印から、ド・ロ神父が黒崎教会堂建設のために 1914 年 6 月までに設計したもので、図面作成は鉄川与助と判断される。宣教師たちが手掛けた教会堂でこれだけ図面が揃うのは稀少である。実際にはこの図面は使われず、規模が大きく、リブ・ヴォールト天井の内観をもつ黒崎教会堂が建設された。

③まとめ

川原家の関与が特定できるのは 11 件だが、江袋教会堂に見られるド・ロ神父の影響が色濃く残る建築的特色から、外海の出津教会堂・1882、旧出津救助院・1883、大野教会堂・1893 をド・ロ神父の元で手掛け、教会堂建設の技術を得たと考えられる。それが、川原家の手掛けた教会堂は、代が変わっても統一した建築的様相を見せることにつながっている。

（３）鉄川与助の教会堂建設

大工・川原家が、教会堂の姿を切妻造とし、内部は三廊構成、リブ・ヴォールト天井を貫くのに対し、鉄川与助（1879-1976）の手掛けた教会堂は、正面に塔を備え、身廊部の屋根を高くし、高窓を設ける点に大きな展開がみえる。与助の手掛けた建物を総覧にまとめたところ（拙著『鉄川与助の大工道具、長崎の教会堂に刻まれた知恵と工夫』長崎文献社、2018）、青砂ヶ浦天主堂（1910）から身廊部の屋根を一段高くするようになり、身廊の壁上部に高窓が付くのは今村天主堂・1913 で（但し丸窓）、その高窓が半円アーチ窓になるのは田平天主堂・1918 である。

①宣教師との協同

与助の『当用日記』1917 年（鉄川進氏所蔵）によると、田平天主堂の建設にあたり、与助はマタラ神父や中田神父と会談を重ねる。やりとりから、教会堂建設は神父との協同で、設計や色の決定は神父に重みがある。神父が教会堂建設に長けていたことを示す。完成間近には中田神父と黒島天主堂（1902・マルマン神父）を見に行く。田平天主堂は黒島天主堂の影響を受けていることを林一馬氏が指摘するが、実見の記録がそれを裏付ける。高窓の半円アーチを含む室内立面や、天井が与助では数少ない板張りである点は、黒島天主堂を参考にしたと思われる。

②与助のデザインブック『美術的建築』

与助の研究熱心のひとつが、『当用日記』1917 年に記録が残る中村與資平（1880-1963）著『美術的建築』（1917）の購入である。『美術的建築』は、中村の朝鮮半島における銀行建築設計の経験から、建築における装飾の要素を網羅し、建築家が渉る柱式の参考になるようにとリーズ『公共建築装飾論』を翻訳したものである。与助はこの本を、頭ヶ島天主堂、細石流天主堂、奈留島

村役場の設計に用いた。当時の日本の社会情勢と中村の苦労が、与助のデザインの幅を広げた。
③まとめ
　与助は、1906 年から 1951 年まで、69 箇所の建物を手掛けた。49 箇所がキリスト教関係施設で、アセベール師、ヒウゼ師、チリ師、ドロ師、マタラ師、ガラセ師、大崎八重師、片岡高俊師、島田喜蔵師、中田藤吉師から複数回の依頼を受けている。教会堂だけでなく、司祭館、修道院、学校もある。与助の晩年の山口愛次郎大司教との対談によると、フランス人宣教師はすでに建築の知識と技術を身に着け、長崎の在来工法を観察し、不足な点は改善させた。与助はその助言を取り入れ、自らの現場に反映させた。いずれの現場も協同作業で、与助はそのやりとりがスムーズで、研究熱心だったことが、多くの教会堂と関連施設を手掛けることにつながった。

（4）ミッショナリー・アーキテクト、J.H.ヴォーゲル
　長崎の教会堂を調べる中で、活水学院や鎮西学院を手掛けた建築家Ｊ.Ｈ.ヴォーゲル（Joshua Helmes Vogel、1889-1970）を調べる機会にも恵まれた。ヴォーゲルは、オハイオ州立大学建築学部卒業後、1913 年に来日してヴォーリズ合名会社に入り、1917 年までパートナーを務め、明

図 2　川原家 3 代の系譜、手掛けた教会堂一覧、位置図

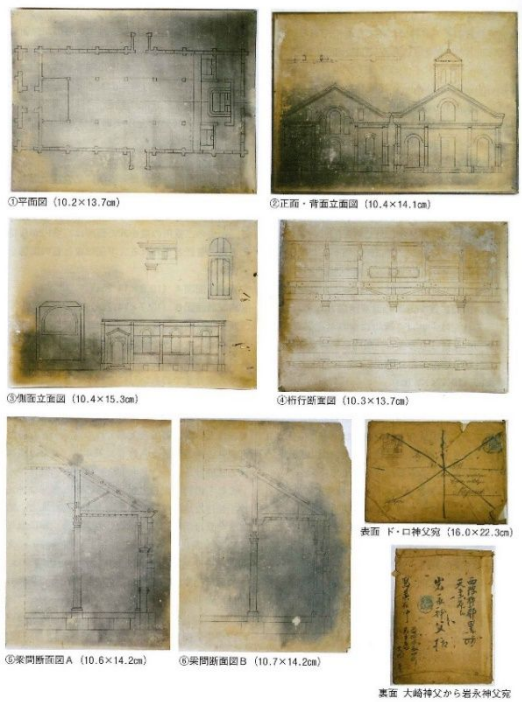

図 3　片山伝次郎御子孫所蔵の図面写真

年月日	歳	経歴（括弧内は経歴書による年収）	居住地
1887		Hellen Holllster　誕生	
1889.1.25	0	Joshua Helmes Vogel　誕生 父 John Peter Vogel 1855-1940 母 Genevieve Anderson 1863-91	South Dakota, 米国
1912	23	OSU　建築学部卒業、ヘレン学士論文 "Design for a Fireproof Suburban Residence wi th Specification and Estimate present for the degree of Bachelor of Architecture." 1912	Columbus, Ohio 米国
1912.6-12	23	E.Elford & Co.　勤務[S 1800]	
1913.1-1917.6	24	ヴォーリズ合名会社勤務 [S 3600]	近江八幡, 日本
1915.5.25	26	挙式，於近江八幡キリスト教会、媒酌人ヴォーリズ即、嫁入ウォーターハウス夫妻	東京, 日本
1916	27	長男 Peter Hollister Vogel　誕生（軽井沢、－2005）	
1917.7-1918.6	28 29	OSU　大学院、修士論文" The Introduction, prehistoric & Shinto Ages of the History of Japanese architecture." 1918	Columbus, Ohio 米国
1918.7-1919.12	29 30	Nat'l War Work Council Y.M.C.A　勤務[S 2400]	San Francisco, Calif. 米国
1919.12-1921.3	31 32	Firm of Baker, Vogel and Rush 勤務[S 6000]	Seattle, Wash. 米国
1921.3-1925.5	33	Board For Missions M.E, Church 勤務[S 4800]	上海
1923 - 24	34		牯嶺 Kuling
1923.9.1		日本で関東大震災発生	
1923.10.5	35	Association of Chinese and American Engineers　所属 No.249	蕪湖 Wuhu, 中国
1925.5-1926.9	36	W.F.M.S- 活水女学院、九州女学院 [S 4800]	長崎・熊本, 日本
1926	37	鎮西学院計画案	
1926.9-1936.8	37	Firm of Baker, Vogel and Rush [S 3600]	Seattle, Wash. 米国
1930	41	シアトル郊外ボザール村に自邸建設，" POPULA R SCIENCE MONTHLY "1930.12 月号に建築家自邸紹介として掲載。	
1933.12-1934.3	44	C.W.A. and W.E.R.A. Kirkland, Wash[S 1680]	
1934.10-1935.7	45 46	W.E.R.A. Sanitary survey, City Seattle Slide-Central[　S 1440]	
1945	56	ワシントン大学に研究室をもつ	
1947	58	夫人ヘレン死去	
1959	70	仕事引退	
1970	81	心筋梗塞で死去、シアトル郊外 Sunset Hills Memorial Park　に夫人と眠る	

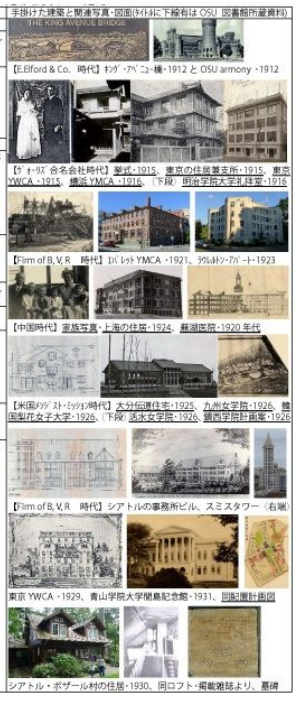

図 4 J.H.ヴォーゲルが手掛けた建物一覧

治学院礼拝堂、東京 YWCA、横浜 YMCA などを設計した。第一次世界大戦の混乱が落ち着くと、再び上海、長崎に着任し、晩年はシアトルの都市計画に関わった。図４は、オハイオ州立大学所蔵のヴォーゲル資料から、手掛けた建物を一覧にしたものである。

W.M.ヴォーリズ(1880-1964)が SVM（海外宣教学生ボランティア運動）から YMCA 派遣の英語教師として近江八幡に着任した後、建築設計を始めたのは、自らの伝道活動の活動資金を得るためであったことが、吉田与志也氏著『信仰と建築の冒険、ヴォーリズと共鳴者たちの軌跡』（サンライズ出版、2019）で明らかにされた。ヴォーゲルは、療養のために一時帰米するヴォーリズに代わるミッショナリー・アーキテクトとして来日した。近江八幡では、設計・監理の他に、バイブルクラスも受け持った。伝道活動の資金を得るために設計事務所を立ち上げたのはガーディナー（1857-1925）もそうであり、アメリカン・ボードの特色である。

ヴォーゲルの 1921 から 1926 年の上海、長崎での仕事は、アメリカン・ボードからミッショナリー・アーキテクトとして給与を受けての派遣である。上海から揚子江を遡った蕪湖、九江でも教会や病院を手掛け、韓国・ソウルの梨花女学院にも携わった。ヴォーゲルのアジアでの設計活動を通観すると、長崎、仁川、上海の開港都市は、アメリカン・ボードにとって重要な宣教活動の窓口であった。これは、パリ外国宣教会にとっても同じである。大浦天主堂境内に、朝鮮教区の 4 殉教者の遺骨を 1882 から 1894 年まで堂内で保管した碑が建つのはその一例である。

（５）1907 年「五足の靴」に見る南蛮文化の影響

本研究のまとめとして、作家・森まゆみ氏に、著書『「五足の靴」をゆく、明治の修学旅行』（平凡社、2018）について講演いただいた。「五足の靴」は、1907 年夏、与謝野鉄幹（1873-1935）、北原白秋（1885-1942）、吉井勇（1886-1960）、平野万里（1885-1947）、木下杢太郎（1885-1945）が、天草の大江天主堂を目指し、九州を旅した紀行である。

①「五足の靴」が描いた南蛮文化

森氏によると、この旅は 5 人とも森鴎外の訳した『即興詩人(Improvisatoren.)』を読み、特に木下杢太郎が図書館に行って、当時の南蛮文学、天草四郎や島原の乱について調べたことで、是非長崎や天草に南蛮の匂いを嗅ぎに行きたい、西洋カトリック世界、禁教になったキリシタンの世界を知りに行く旅に変わったという。その結果、パリ外国宣教会のガルニエ神父のいる大江教会を訪ね、長崎を訪ねた。5 人は隠れキリシタンやキリシタン弾圧、島原の乱、南蛮文化に興味を持ち、『邪宗門』『南蛮寺門前』『明星』の作品を描く。大正から昭和初期の文壇に、南蛮、阿蘭陀、浪漫、キリシタンなどの言葉が繰り返し出てくるのは、その影響である。

②鉄川与助らとの同時代性

「五足の靴」の 5 人は、鉄川与助（1879-1976）、ヴォーリズ(1880-1964)、ヴォーゲル（1889-1970）と 10 歳も歳の差がなく、同時代に活躍した。3 者の教会堂の充実期は 1915 年頃で、それは「五足の靴」後の南蛮文化が文壇に花開く時期と一致する。3 者は、当時の日本の人々が期待した西洋世界を建築の姿に反映させたのではないかとさえ考えられるのである。

（６）おわりに

本研究は当初、旧出津救助院所蔵のド・ロ神父関連道具の調査を行い、データベースを作成し、パリ外国宣教会のわが国における教会堂建設と授産事業を実証的に再検討することを目的とした。道具の調査は 2016 年度に終了し、フランス製の織物道具など貴重なものが明らかになった。授産事業の一端を明らかにできた。一方で、教会堂建設に直接つながる道具は少なかった。

そこで、ド・ロ神父と協同で教会堂建設に携わった大工・川原家と鉄川与助に焦点を当てた。これまで、鉄川与助の手掛けた教会堂については調査研究が進んでいたが、改めて、手掛けた建築を総覧し、『鉄川与助の大工道具』に収録した。その結果、司祭館、授産施設、教育施設、行政施設など幅広い建築を手掛け、長崎県外にも多くの活躍の場があったことが確認できた。県外の活躍の場は、近代の工業化に伴い、長崎の離島部から信者が移住した場所でもあった。

川原家の手掛けた教会堂については、初めての一連の調査研究である。成果を 2019 年 5・6 月にナガサキ・ピースミュージアムで展覧会「大工・川原家と教会堂建設」として展覧した。2018 年 7 月に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産登録された。登録物件の教会堂は、鉄川与助が手掛けたものが多数を占めることから、川原家が手掛けた教会堂は注目されることが少なかった。しかし、江袋教会堂や馬渡島教会堂等、明治初期の木造教会堂は川原家によるものであり、鉄川与助以前の教会堂建設の様相を伝えるとして貴重である。

さらに、長崎の活水学院や熊本の九州女学院を手掛けた米国人建築家Ｊ.Ｈ.ヴォーゲルの事績を明らかにできたのも大きな成果である。ヴォーゲルは、最初の日本滞在中に、東京帝国大学の伊東忠太のもとで古代神社建築について研究を進め、1917 年にはこの内容でオハイオ州立大学で修士号も取得した。1926 年の帰国後も建築家として活躍したかったようだが、実らず、シアトル市の都市環境改善のための計画策定に携わった。結果として、現在の環境都市シアトルの名声につながった。

研究期間に、森まゆみ氏の『「五足の靴」をゆく』、吉田与志也氏の『信仰と建築の冒険』が発行されたのも幸運なことであった。本研究を多面的に展開することができた。

調査にあたり関係諸氏に大変お世話になった。記して感謝したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山田由香里	４．巻 34
２．論文標題 大工・川原家３代による教会堂建設	５．発行年 2019年
３．雑誌名 長崎総合科学大学地域科学研究所紀要『地域論叢』	６．最初と最後の頁 63-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田由香里	４．巻 2018
２．論文標題 旧長崎警察署庁舎（大正12年・1923）について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 2018年度日本建築学会九州支部研究報告集	６．最初と最後の頁 577-580
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田由香里	４．巻 2019
２．論文標題 建築家Ｊ.Ｈ.ヴォーゲルの足跡――オハイオ州立大学図書館所蔵資料より	５．発行年 2019年
３．雑誌名 2019年度 日本建築学会大会学術講演梗概集	６．最初と最後の頁 711-712
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田由香里	４．巻 35
２．論文標題 講演会記録、森まゆみさん、『五足の靴』をゆく	５．発行年 2020年
３．雑誌名 長崎総合科学大学地域科学研究所紀要『地域論叢』	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田由香里	４．巻 33
２．論文標題 旧長崎警察署（旧長崎県庁第三別館）の建築学的価値について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 証言2019、ナガサキ・ヒロシマの声	６．最初と最後の頁 225-227
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山田由香里
２．発表標題 旧長崎警察署庁舎（大正12年・1923）について
３．学会等名 2018年度 第58回 日本建築学会九州支部 研究発表会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山田由香里
２．発表標題 建築家Ｊ.Ｈ.ヴォーゲルの足跡――オハイオ州立大学図書館所蔵資料より
３．学会等名 2019年度 日本建築学会大会学術講演梗概集
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 山田由香里	４．発行年 2018年
２．出版社 長崎文献社	５．総ページ数 132
３．書名 鉄川与助の大工道具、長崎の教会堂に刻まれた知恵と工夫	

〔産業財産権〕

〔その他〕

展覧会開催「大工・川原家と教会堂建設」ナガサキ・ピースミュージアム（長崎市）、2019/5/21-6/16、入場者数518人。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考